

りしかど、御齡たけさせ玉ひては、殊更御身の爲宜しかるまじと、一橋邸よりひそかに御諫言ありしとなむ、夫より後は三獻の外は召上られざりき、一とせ御放鷹として、近郊に渡らせ玉ひしに、その日風雪にて寒氣凜冽なりしかば、御供の人々堪難きさまを、あはれませ玉ひ、あまぬく御酒賜はりし事あり、其時傍に候せし某、今日などはちと御過し遊ばさるとても、寒氣御凌の爲なれば苦しかるまじと申上しに、そこを呑ぬが男なりと御戯言あり、三獻の外召上られざりしとなむ、これらは假初の御事なれど、人々嗜物抑遏するは、いかにも難きことなるにかゝる御振舞は、すべて凡慮の計りぞりがたき御事なり。

〔雨窓閑話〕奥州泉領孝子井名君行狀の事

一奥州泉の領主本多彈正少弼忠籌侯、領分の内に甚孝心の百姓あり、年頃四十餘、父はもはや八十にちかし、其孝志是までつひに父の氣にさかひし事なく、一圖に孝道をつくすこと、いふべくもあらず。略○中老人若き時よりして冷酒をこのみ、毎日農作に出づる時、先冷酒を茶碗に三つづ飲み出づる事、一日もかく事なし。略○中ある日、老父いつもの農業より歸りて、泣然として落涙する事あり、孝子其様子ことなるを尋ねけるに、老父の曰く、さればの事よ、今日農作に往きたる所、勿體なき嘶を聞きて、有難さに涙こぼる、なり、殿様には、平日御汁をも御あがり遊ばされず、略○中御近習の衆、御養生になるまじき由申し上げられしに、か様にして、下々の者をこやしてやりたしとの御意有りし旨をき、誠に身にこたへ骨に通りて有りがたく、覺えず涙を流して、其方に早くいひきかせ、我らも是迄の酒をやめ申さんとて急ぎて歸りしなり、あ、勿體なしくとて、夫より一向に禁酒せりとぞ、

〔鶴衣下〕斷酒辨

もとより李杜が酒腸もなければ、上戸の目には下戸なりといへども、下戸なる人には上戸とも